

2015年12月13日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書1章39～66節

説教：私を幸せ者と思うでしょう

1 マリヤの不安

前回は、御使いガブリエルがマリヤに向かって「おめでとう、恵まれた方」とあいさつをした後に、マリヤをとおして救い主がお生まれになると告げた場面を見てきました。マリヤはヨセフと婚約中です。そんなときに、ヨセフのではない子供を宿すこととなります。とても「おめでとう」と言われるような話ではありません。もし、このことをヨセフが理解してくれなかったならマリヤは律法によって石打の刑に処せられる可能性があります。たとえそうならなくても、ふしだらな女と言われ、日陰者として一生生きていかなければならなくなるかもしれません。そんなことを考えると、マリヤの不安は募るばかりです。

神はマリヤの気持ちを知っておられます。そこでマリヤを励まそうと、御使いの口を通して親戚のエリサベツのことを紹介します。

「エリサベツは、ずっと子供を産むことのできないからだではなかったか。それなのにいまは男の子を宿して六ヶ月目を迎えている。神にとって不可能なことは一つもないのだから、あなたは心配することはない。」

これを聞いてマリヤは、すぐにエリサベツの所に向かう準備をします。その様子が39節にあります。「そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。」

なぜ急ぐのでしょうか。御使いのことばをほんとうに信じていたのなら急ぐ必要はないでしょう。急ぐのは、マリヤの中に不安があるからです。でも、マリヤはあのとき38節

でこう告白していたのではないか。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」これを読むとマリヤはこの時御使いのことばを完全に信じたように思われます。それなのにどうしてマリヤは不安だったのか。

私の例を挙げましょう。私は2000年の3月に会社を辞め、妻と一緒に神学校で学ぶという決心をしました。もちろん自分勝手に決めたのではなく、祈りに神が応えてくださったとの確信があったのでそうしました。今もその確信は揺らぎません。では、何も不安がなかったかというそうではない。いろんな不安や恐れがありました。入ってから数ヶ月したとき、もう神学校を辞めようかと思ったこともあります。神のみこころと信じて決断しても、いざ厳しい試練がやってくると不安や恐れがどうしても出て来ます。それが私たちの現実ではないですか。

マリヤも同じです。いや、マリヤの場合もっと深刻です。最悪の場合、死刑になる可能性がある。たとえどんなにすばらしい告白ができたとしても、不安は不安なのです。その不安がマリヤの足を急がせます。

2 エリサベツ

エリサベツはマリヤを迎えます。その時の様子が41、42節にあります。「エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福され

ています。」

この中で、「マリヤのあいさつを聞いたとき」ということばに注目してください。マリヤはあいさつをただけです。まだ自分の身に起きたことは話していません。なのにエリサベツは、マリヤのあいさつのことばを聞いた瞬間、聖霊に満たされ、大声をあげて叫びました。

「あいさつを聞いたとき」ということは、エリサベツ自身も強調して証言しています。43 節から 45 節です。「私の主の母が私のところに来られるとは、なんということでしょう。ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、なんと幸いなことでしょう。」

マリヤはあいさつただけで詳しいことを話していない。けれどもエリサベツはあいさつのことばを聞いただけで、すべて了解していった。不思議なことです。聖霊に満たされたので、としか説明ができません。とにかく、エリサベツはマリヤのことを、「主によって語られたことは必ず実現すると信じ切った人」と最高のほめことばで迎えました。

3 マリヤの賛歌

1) 不安から平安へ

マリヤがエリサベツの家の玄関の前に立ち、「ごめんください」と声をかけるとき、マリヤがどんな気持ちであったのかを想像してみてください。やっとな着いたという安堵感は少しはあったでしょう。でも、一方では不安がピークに達していたのではないですか。エリサベツは理解してくれるだろうか。「私は結婚前のからだですが、聖霊によって

男の子を産むことになりました。」どう考えても非常識な話です。そんな話を信用してくれというのは難しいのではないか。もしかすると、怒られて追い返されるかもしれない。

エリサベツが玄関に出て来て、マリヤはあいさつはしました。でも、肝心のことが言えずにもじもじしていました。そうしたら、なんとエリサベツのほうから全部言ってくれた。だれが驚いたと思いますか。マリヤのほうです。それでマリヤはわかりました。御使いが語ったことはほんとうだった。自分に語られたことは全部信じてよいと確信ができました。そのとき初めて心に平安をいただきました。

よかった、と言いたいところですが、「おや？」と思うところが一つ残っています。気がついたでしょうか。エリサベツはこう言っていました。「主によって語られたことは必ず実現すると信じ切った人は、なんと幸いなことでしょう。」

マリヤは、信じ切れないことがたくさんあって不安を胸に抱えながら玄関に立っている状態でした。ところがエリサベツは、「信じ切った人」と言っている。辻褄があいません。これはどういうことか。

突然御使いからいろいろなことを聞かされて、マリヤが不安にならないはずはない。神はよくご存じなのです。なので、神はあらゆる方法でマリヤを励まそうとされます。どのようにしてか。親類のエリサベツが男の子を身ごもるといふ奇蹟を与えます。そしてエリサベツが聖霊で満たされながら、「あなたは信じ切った人になります」と言う。そのような方法です。

完全には信じていないのに、信じ切っていると言う。おかしいと思いますか。いいえ、

聖書はいつもそういう表現方法をとります。たとえば、「あなたは救われました」と言います。実際はまだ完全な救いをいただいている訳ではありません。けれども将来救われることが確実なので、こういう言い方をしています。マリヤの場合も同じです。

2) 私を幸せ者と思うでしょう

マリヤは、46 節以降で信じていく喜びを告白します。その中の 48 節に目を留めます。「主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どんな時代の人々も、私を幸せ者と思うでしょう。」

人々は私を幸せ者と呼ぶだろう。マリヤはそう告白しています。「自分は幸せ者です」と言っていないことに注意してください。なぜこのような少し回りくどい言い方になるのか。マリヤは二つの事を見ているように思えます。

3) 救い主は殺される

一つ目。マリヤは、救い主が人々の手によって殺されることを知っています。それはとりもなおさず、自分の産んだ息子が将来殺されることを意味します。わかっていて産まなければならない。母親としてこんな悲しいことはない。「私は幸せ者です」とはとても言うことができません。

もしそれだけだったらマリヤは逃げ出したかもしれない。けれどもマリヤは逃げません。向き合おうとします。なぜそうできたのでしょうか。マリヤはもう一つ別のことを見えています。54 節。「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。」

4) 神はあわれんでくださる

今だけを見ているのではない。旧約の時代から語られていた神の救いの約束を思い出しています。神の救いが、大きな時間の流れの中で実現していく。そういうスケールで見えています。

またマリヤは、自分だけを見ているのではない。神のしもべであるイスラエルの人々を見えています。人々が救われるために、自分の小さなからだは役立っていくと受けとめています。平凡な家庭をもって幸せな一生を過ごさず。そんな人生はあきらめなければなりません。だれも経験したことのない試練と苦しみに満ちた人生になることがわかっています。それでもマリヤは向き合うことにします。

御使いはマリヤに語りました。「主があなたとともにおられる。」エリサベツを通して、今、そのことが信じられるようになりました。主が私に先立って、苦しみを通ってくださるのなら、私も主の御あとをついていく、そのような決心に導かれます。

私たちもマリヤと同じかもしれません。今の目の前のことだけを見たら、苦しみしか見えないかもしれない。自分ひとりだけを見たら、みじめな自分しか見えないかもしれない。でも、神は必ず時が満ちたとき必ずあわれんでくださる。そんな時間の流れを見る視点が与えられます。自分ひとりではなく、神の民たちを救うために、こんな私をも通して働いてくださる。そんな視点を与えられたとき、前に一步踏み出していく力が与えられます。

このクリスマス、主が与えてくださる恵みの広さと豊かさを覚えます。

